様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３２４９

研究課題名（和文）ユーラシア諸帝国の形成と構造的展開――王権と軍事集団の比較史的研究――

研究課題名（英文）Formation and structural development of Eurasian empires: Comparative historical research on the relationships between monarchies and military elites

研究代表者
杉山　清彦（SUGIYAMA, Kiyohiko）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：８０３７９２１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、前近代ユーラシア諸帝国と、それぞれの帝国において出自や文化的背景を異にする軍事集団との関係を比較史的に検討するものであり、第一期としてアッバース朝イスラーム帝国、トルコ（突厥）帝国、唐帝国、第二期としてムガル帝国、サファヴィー帝国、大清帝国の6帝国を対象として取り上げた。比較研究を通して、(1)いずれにおいても、外来性を有する軍事エリートと軍事制度が重要な役割を果していたこと、(2)それらは地理・文化・住民面で境界的な地域を来源とすることが多いこと、(3)とりわけ君主や宮廷と密接に関係していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
前近代ユーラシアの諸帝国において、王権が外来性をもつ軍事集団に支えられていたこと、それらが文化・信仰・生業が混淆する境界地域に出自し、多様性・複合性を有することの実証的提示は、時代・文化圏によって切り分けがちであった従来の帝国理解を刷新するものである。さらに、これら広汎な軍事エリート・軍事制度の形態・機能の解明は、日本中世・近世史の武士論・国家論、西欧中世・近世史の国制史・軍事革命論などの新動向と対応するインパクトをもっており、世界史的な比較史への道を開くものでもある。

研究成果の概要（英文）：In our program, we attempted to carry out a comparative historical research on the relationship between pre-modern Eurasian empires and their military subordinates who were from different ethnic groups and had different cultural backgrounds. We made six empires as the subject of our research: Islamic Empire of `Abbasid dynasty, Turk (Tu-jue) Empire, and Tang Empire in the medieval period; Mughal Empire, Safavid Empire, and Manchu-Qing Empire in the early modern period. We clearly showed that (1) military elites and military organizations of foreign origin played an important role for each empire, (2) they generally originated in the geographical, cultural, and ethnic border areas, and (3) especially they closely related to monarchs and their courts.

研究分野：東洋史学

キーワード：武人　ユーラシア　比較史　帝国　王権　宮廷　奴隷軍人　遊牧民

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は､時間的･空間的に広大な範囲にまたがる前近代ユーラシアの諸帝国を対象として、その形成・運営に深く関わった軍事集団に焦点を当てて、比較史的検討を行なうものである。その前提となるのは、近年、イスラーム史・中央ユーラシア史を中心とし、またそれと連動して中国史においても進んでいる、ユーラシア諸地域の帝国に関する理解の刷新である。すなわち、社会経済史から政治史・制度史への回帰、支配・対立よりは統合・共存の側面への注目、民族・文化の多様性・可塑性の重視、といった潮流であり、そのような中で、軍事力の担い手となった武人集団と軍事制度についても、イスラーム世界のマムルークやイェニチェリ、千戸制や八旗制といった東方の内陸アジア的軍制などの新しい研究が展開してきた。しかし、現状はなおイスラーム史や中国史など、特定の時代・地域・文化圏の範囲内での議論に止まっており、それがユーラシア規模でいかなる特徴をもち、世界史的にどのような意義をもつのか、といった鳥瞰的視野からの比較検討は、未だなされていない。

このような研究状況に対し、研究代表者・分担者のうち 4 名がメンバーとなって実施した科研費基盤(B)「ユーラシア諸帝国における君主と軍事集団の展開」（平成 24～26 年度）では、アッバース・サファヴィー・ムガル・大清 4 帝国を取り上げ、イスラーム史・中国史、あるいは中世史・近世史といった枠を取り払って、君主と武人の主従関係と紐帯、それを支える集団意識・倫理観について共同研究を行なった。その結果、一見異なる歴史背景・地域環境に規定されていると思われるこれら諸帝国が、実は共通性の高い権力編成・組織形態をとっていたこと、その中核に、極めて類似した特徴をもつ軍事集団が位置していたことが明らかになった。この成果を承けて、研究対象として、アッバース帝国と同時期の東方の帝国である唐・トルコ（テュルク、突厥）両帝国を加えて 6 つの帝国を取り上げ、王権と軍事集団の関係とその特質を実証・比較両面で検討することにしたのが本研究である。

２．研究の目的

本研究は､前近代のユーラシア諸地域において広域･多民族支配を行なった帝国を対象として、国家建設の軍事力にして国家経営の統治集団ともなった軍事集団と軍事制度のあり方に焦点を当て、国家形成・運営の両面において軍事集団が果した役割とその特質を、汎ユーラシア的に解明することを目的とする。対象とする上記6つの帝国は、時代的には7～9世紀前後（第一期）のアッバース・トルコ・唐3帝国と16～17世紀（第二期）のサファヴィー・ムガル・大清3帝国とに、また地域的には西方のアッバース・サファヴィー・ムガル3帝国と東方のトルコ・唐・大清3帝国とに分れ、バランスよく比較検討することができる。これらに対し、まず(1)武人・軍事集団の〈越境〉すなわち空間的流動性、(2)軍事集団およびその出身地域の人的・空間的重層性、(3)武人と王権・宮廷との関わり、の3つの観点から、それぞれに対する実証研究を進めた。さらに、中世・近世、東方・西方といった既成の枠を取り払ってこれらを比較検討して、国家形成と軍事力の関わり、軍事集団の外来性とそれが国家形成に与える影響、国家経営における軍事集団の役割とその参与の形態、といった諸点に、従来の各国史的研究とは異なる角度からアプローチした。

３．研究の方法

本研究は、専門とする時代・地域を大きく異にする研究者が、各自の実証研究を深めつつ、それを提示しあって比較検討を行なうとともに自らの研究にフィードバックするという循環をめざすものである。とりわけ本研究の特徴は、その比較・循環の範囲が、ユーラシア大陸の東西、約 1000 年と、空間的・時間的に非常に広い範囲にまたがることと、いずれの分野においても史料環境が飛躍的に向上しており、実証・比較いずれにおいても新たな進展が見込まれるこ

とである。この特徴を活かすべく、次のような研究活動を展開した。
(1)各人が個別に実証研究を展開するとともに、高密度に研究会を開催して研究報告・討論を行ない、実証・比較双方での深化を図った。近年の史料環境の飛躍的向上を背景に、各自の実証研究に大きな進展がみられるとともに、文化圏・時代を超えたメンバーが集まっているがゆえに、各自の分野の中だけでは行ないえない情報交換（例えば、トルコ語語彙・概念のユーラシア規模の拡散・変容）なども可能となり、研究の進展に資した。
(2)研究会においては、外部の専門家を招いた研究発表も頻繁に実施し、比較研究の深化を期した。第一期については平田陽一郎（北朝隋唐史）、渡邊美樹（契丹史）、伊藤一馬（中国宋代史）、第二期については前野利衣（北元期モンゴル史）、メンバーに専家のいない一・二期の間の時期については舩田善之（モンゴル帝国史）、中町信孝（エジプト・マムルーク朝史）の諸氏から報告を受けた。海外の研究者との協働も行ない、次項でも述べるように、ジョージア（グルジア）の研究者であるアレクサンドレ=ボシシュヴィリ、タマズ=ゴゴラゼ、オクロピリ=ジクリ諸氏を招聘して公開国際セミナーを実施した。
(3)武人集団の揺籃の地となってきた農牧接壌地域に注目して、共同海外現地調査を実施し、知見・体験の共有、問題点の発見に努めた。まず第 2 年次に、トルコ帝国・モンゴル帝国の本拠地であったモンゴル高原（モンゴル国）で史蹟調査と博物館・研究機関訪問を実施し、通時的に遊牧国家・騎馬軍事力の母体となってきた草原世界についての理解を深めた。また第 4 年次には、大興安嶺南部の草原地帯（中国）を踏査し、遼・金・元・清といった諸帝国の枢要の地を実見するとともに、南北数百 km におよぶ乾燥地域を縦走することで、自然環境と人間集団の関係を比較史的にとらえることができた。
　次項で述べるように、これらの活動の成果を総括するシンポジウムの開催を最終段階に設定しており、公開シンポジウムとして実施した。

４．研究成果

　本研究では、前近代のユーラシア諸地域に興亡した帝国を対象として、その国家建設の原動力にして運営・統治の担い手ともなった軍事集団・軍事制度の様態とその特質、および武人と君主・宮廷との関係のあり方について、比較史的検討を行なった。これを通して、部族や信仰など結集核を有する武人集団が、ユーラシアの乾燥帯諸地域の広域帝国において、移動・越境して軍事・統治に起用され、重要な役割を果していたこと、その一方で故地との連絡や近しい集団との紐帯を維持し続けていたこと、このような武人集団は君主の宮廷と密接に関係し、家政・国政両面を支えていたことなどが明らかとなった。
(1)具体的には、帝国形成・運営の担い手となった軍事集団や軍事制度は〈外来性〉と〈越境性〉を有しており、また軍事権力をその本質とする諸王権もまた、これら外部起源の軍事集団を軍事力と統治人材の母体として積極的に起用していた。①第一期においては、トルコ系武人や軍事集団がユーラシアの東西に進出し、政治・軍事の動向に大きな影響を与えていた。西アジアのアッバース帝国では、流入してきたトルコ系武人が奴隷軍人として登用されて政治・軍事を左右するようになっていき、東方では、唐に服属したトルコ系遊牧集団が、在来の部族的統治形態を維持したまま軍事力として編成されて、唐の実戦軍の主力をなしていた。これらトルコ系武人や軍事集団の系譜・移動は、トルコ（突厥）帝国の部族構成の解明の進展によって、より跡づけられるようになり、ユーラシアの東西にわたるトルコ系軍事勢力の拡散と活動の実相が明らかとなった。②第二期の諸帝国は、ポスト=モンゴル期を経て大型化・安定化しており、強力な王権の下で、有力武人や軍事集団が広域にわたって移動・起用されていた。サファヴィ

ー帝国では、西北のコーカサス出身のゴラーム軍人が、出身地との紐帯を維持しつつ、王権に直結して東方統治に起用されるなど、地域・信仰・文化的境界を跨ぎつつ双方向的に活動していた。中央アジアからインドを征服したムガル帝国、マンチュリアから中国を征服した大清帝国は、もとより混成的・外来的な軍事集団による王権であるが、その外来性・複合性を核として王権・軍事力の求心性を維持し、広域・多様な帝国の統治に当った。それゆえ、王権・宮廷と武人・軍事集団は密接な関係にあり、宮廷儀礼や位階制度を通して統合が図られていた。

(2)研究成果の総括・発信のために、シンポジウムを企画した。第 3 年次には、上記のようにジョージアからボシシュヴィリ・ゴゴラゼ・ジクリ諸氏を招聘し、2 回の公開セミナーとして、東京大学で国際セミナーⅠ“ On the Border of Calkedon and non-Calkedon: New Perspective on the History of Medieval Georgian Nobles ”(カルケドン派と非カルケドン派の境界地帯：ジョージア中近世豪族研究の新潮流)、神戸大学で国際セミナーⅡ“ Georgina Landed Nobility and Neighboring Powers: “Revolts” Reconsidered ”(ジョージア中近世豪族と周辺諸勢力との関係：カルトリ王に対する諸反乱再考)を開催した。日本において中近世コーカサス史の実証研究の報告・討論を公開で行なう国際セミナーは非常に珍しく、メンバーのみにとどまらず、ロシア東欧史・東方キリスト教史などの専門家の参加も得て、交流と発信を広く行なうことに成功した。

研究の総括として、開催自体は研究期間外ながら、本研究終了直後の次年度 4 月に、メトロポリタン史学会と共催で公開シンポジウム「世界史の中の武人――越境と帝国秩序――」を開催した。本科研から唐・ムガル両帝国についての研究報告と大清帝国の分野からのコメントを行ない、本科研外からの日本中世武士論・ドイツ近世軍事史の報告を交えて、討論を展開した。これらを通して、ユーラシア諸帝国をも超えた、日本史をも含む真の世界史的比較研究への途が開かれたといってよく、実証研究の深化とその比較史的総合という本研究課題の企図は、対外発信も含めて充分に果されたと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１１件）

① 杉山 清彦、近世東アジアの二つの武人政権――大清帝国と織豊政権・徳川幕府――、ふびと、査読無、70、2019，117－150　DOI:なし

② 山下 将司、安史の乱における唐陣営下のソグド武人――「唐・李志忠墓誌」を手がかりに――、日本女子大学紀要（文学部）、査読無、68、2019、35－54　DOI:なし

③ 山下 将司、安史の乱におけるソグド人李抱玉の事績について、史艸、査読有、59、2018、28－56　DOI:なし

④ 真下 裕之、クトゥブ・シャーヒー朝の起源に関する諸説とその周辺――インド洋西部海域における人的移動の諸相――、西南アジア研究、査読有、86、2017、112－135　DOI:なし

⑤ 杉山 清彦、マンジュ（満洲）王朝としての大清帝国の国制とその歴史的位置――八旗制を中心に――、専修大学法学研究所所報、査読無、55、2017、22－59　DOI:なし

⑥ 清水 和裕、初期イスラーム時代の奴隷女性と境域の拡大、歴史学研究、査読有、950、2016、2－10　DOI:なし

⑦ 鈴木 宏節、2016年度夏期モンゴル・ゴビ調査報告、青山学院女子短期大学紀要、査読無、70、2016、107－125　DOI:なし

⑧ 前田 弘毅、Transcending Boundaries: When the Mamluk Legacy Meets a Family of Armeno-Georgian Interpreters、Princeton Papers: Interdisciplinary Journal of Middle Eastern Studies、査読有、17、2016、63－86　DOI:なし

⑨ 杉山 清彦、二つの新興軍事政権――大清帝国と徳川幕府、アジア遊学：「近世化」論と日本「東アジア」の捉え方をめぐって、査読無、185、2015、41－55　DOI:なし

⑩ 鈴木 宏節、唐の羈縻支配と九姓鉄勒の思結部、内陸アジア言語の研究、査読有、30、2015、223－255　DOI:なし

⑪ 鈴木 宏節、ゴビの防人――モンゴル発見の唐代漢文銘文初探――、史滴、査読有、37、2015、59－80　DOI:なし

〔学会発表〕（計１６件）

① 清水 和裕、地中海型奴隷制度論と隷属の類型、第116回史学会大会公開シンポジウム「「奴隷」と隷属の世界史」、2018

② 鈴木 宏節、突厥ヒルギシーン=オボー碑文と八世紀前半のハンガイ山脈南麓、内陸アジア史学会大会、2018

③ 杉山 清彦、明季清初時期的佟佳氏族衍及其活動、国際満学学術研討会、2017

④ 杉山 清彦、在清代八旗中旗人的“満洲化”与“士人化”、第2回「跨越想像的辺界：族群・礼法・社会」国際学術会議、2017

⑤ MAEDA, Hirotake, Voices of Caucasians at the Safavid court: life and activities of Parsadan Gorgijanidze、Recovering ‘Lost Voices’: The Role and Depiction of Iranian/ Persianate Subalterns from the 13th Century to the Modern Period, On Subalterns across the Entire Persianate World in the Safavid and Afsharid Periods (1501- 1747)、2017

⑥ MAEDA, Hirotake, Georgian archival sources on the multi-faceted history of tavad-aznauris in Georgia、Archival Studies, Source Studies – Trends and Challenges、2017

⑦ 清水 和裕、初期イスラーム時代の奴隷女性と境域の拡大、歴史学研究会大会、2016

⑧ 杉山 清彦、マンジュ＝大清グルンの歴史的位置――「近世国家」と「中央ユーラシア国家」と――、宋代史研究会・明清史夏合宿の会合同シンポジウム「空間的統合のダイナミズム――「中国」近世再考――、2016

⑨ SUGIYAMA Kiyohiko、The Qing Empire as a Central Eurasian State: From the Manchu Khanate to the Early-modern Eurasian Empire、Global History Workshop: “Globalization from East Asian Perspectives、2016

⑩ MAEDA Hirotake、Baratashvilis’ Activities in the Safavid Empire and its Historical Meanings、7th International Symposium on Kartvelian Studies、2016

⑪ MAEDA Hirotake、Men of transformative: Caucasian converts at the Safavid court in the era of early-modern globalization、International Seminar The Other Europe: Eastern Europeans and Safavid Communities in Spain and Its Wider World. The State of the Art and Lines of Research、2016

⑫ SHIMIZU Kazuhiro、The color black under the Abbasid Caliphate、New Horizon in Islamic Area Studies、2015

⑬ MAEDA Hirotake、Girogi Saakadze’s Revolt in 1625 and an Iranian Bureaucrat’s Perception、The First International Kartvelological Congress、2015

⑭ 杉山 清彦、マンジュ（満洲）から見た大清帝国の支配構造、東北大学東北アジア研究センター創設 20 周年記念企画国際シンポジウム「東北アジア：地域研究の新たなパラダイム」、2015

⑮ 山下 将司、西安新出「唐・翟天徳墓誌」について□□近年多出する「原石不詳墓誌」をめぐって□□、『新中国出土墓誌』刊行 20 周年紀念日中合同中国石刻国際シンポジウム、2015

⑯ 真下 裕之、インドのムスリム諸政権とカリフ：デリー・スルターン朝時代からムガル帝国

時代へ、平成 27 年度九州史学会大会・イスラム文明学部会、2015

〔図書〕（計７件）

① 鈴木 宏節、杉山 清彦、前田 弘毅 他、山川出版社、中央ユーラシア史研究入門、2018、413 (25, 179-186, 251-258)

② MAEDA Hirotake 他、Brill、The Persianate World: Rethinking a Shared Sphere 5、2018、258 (169-195)

③ MAEDA Hirotake 他、Markus Wiener Publishing Inc.、Constellations of the Caucasus: Empires, Peoples, and Faiths、2016、277 (63-85)

④ 山下 将司 他、科学出版社、粟特人在中国：考古発現出土文献的新印証、2016、708 (558-571)

⑤ 杉山 清彦 他、ミネルヴァ書房、地域史と世界史（MINERVA世界史叢書）、2016、315 (97-125)

⑥ 真下 裕之 他、北海道大学出版会、移動と交流の近世アジア史、2016、300 (33-58)

⑦ 清水 和裕、山川出版社、イスラーム史のなかの奴隷（世界史リブレット）、2015、91

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕

ホームページ等　　なし

６．研究組織

(1)研究分担者

清水　和裕（SHIMIZU, kazuhiro）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：70274404

真下　裕之（MASHITA, hiroyuki）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70303899

前田　弘毅（MAEDA, hirotake）

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：90374701

山下　将司（YAMASHITA, shoji）

日本女子大学・文学部・准教授

研究者番号：50329025

鈴木　宏節（SUZUKI, kosetsu）

青山学院女子短期大学・現代教養学科・助教

研究者番号：10609374

(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。